

平成二十四年十月六日（土）

故野村真道豊明姫之霊神四十年祭 偲び草

金光教土佐高岡教会

・初代教会長 野村トヨ師の在りし日



(▲還暦にて)



(▲御結界にて)



(▲元日祭にて)



(▲教会の屋根の上にて)



(▲宇佐の海を眺めて)

祭詞抜粹（一部付加）

平成二十四年十月六日の今日はしも四十年の式年祭を迎え奉れる、故野村真道豊明姫之靈神はし、汝姫は旧の愛媛県南宇和郡城辺町小西町に御父岡本仁太郎ゐ、御母岡本クマゐの九人兄弟の五女として、明治三十六年三月二十一日に現世に生れ出で給ひしも、幼きわずか九歳にして野村治三郎ゐ、千代江ゐの養女となり、高知県にある養家に連れてこられしも、思いもかけぬ養母の千代江ゐは家を出られ行方不明とのこと、尚も治三郎ゐには内縁の妻あり、さらに四人の子も居るならば汝姫と生さぬ仲にて親愛の情なく、幼き中にも言の葉に申せぬ苦勞と寂しさの中に在りては、余のこととて近所の人等の温情を受けられ十五歳にして実の親の知るところとなり、御父仁太郎ゐに連れられ野村の籍はそのままに住み慣れし里に帰る汝姫の心情は如何なるか。

かくて家にありても汝姫は三人の兄弟を相次いで亡くされ悲しき中、御身も十六歳の折にゆくりなくも胸の骨を折るなど大怪我の中にいと体が弱くなられ養生しつつも十七歳の折り、姉が岡本徳一ゐとの妹背の契りを結ぶべく結納も交わし嫁ぎし日を迎えし中に、その姉までも突然の病にて急死となり悲しき中にも、嫁ぎ先の願いもあり姉に身代わりて徳一ゐのもとに嫁ぐに至りしも、心に描く養母の千代江ゐを思いて野村の籍はそのままに嫁ぐは、汝姫の親思う情の深きは尊きことの極みになん。

かくもゆくりなく夫婦になりても背の君の恩愛は深く互いに力をかなへてありしも、愛子の豊一ゐを亡くされるなど親としての苦難にも出遭い、徳一ゐが生業にて大阪に出るとのことにて家族共に居を移してより、汝姫は二十四歳になりて腹膜炎が悪くなり九死一生の大患に罹り、病気のおかげを蒙りたいとの願ひから、金光教南宇和教会で信心を進めし姉ハルノゐの御導きにより、わが道に御神縁を蒙りしも、病気は日増しに重く死の世界をさまようも、大阪にて布教間もない

金光教津守教会に妹キクノゐるが代参し、岸上ツネ師の「私の命を十年短くして頂いても結構でございますから、この氏子を助けて頂きとうござい
ます。」との命がけ一心の御取次御祈念の中に、神みかげ次第に
現われ、一夜のうちに死の淵より救い助けられしは、有難きことの
極みになん。

かくて神慮のままに救い助けられし命を尊び、この道を一人でも多くの
人達に伝えたいとの御思ひは強くなりて、二十六歳にて恩愛深く
ありしも覚悟を決め背の君、徳一ゐに別居を願われ、金光教津守教会に
修行生として入り、欲を放しての真の信心を求められ、信心生活に
励まれる中に、同じく信心を求めて在りし妹キクノゐるが雷好一ゐと
妹背の契りを結ぶに汝姫は親代わりにと努め、さらに好一ゐの妹が
道のおかげを受けたとてツネ師の養女に迎えられることとなり、教会を
思えばこそ後のお邪魔になつてはならぬと汝姫は教会を出られしは
人を思う心の厚きを感じ奉らん。

さればとて神思う信心の心は離さず、兄夫婦を頼りて高知県本山に

移りても金光教の布教所で信心の稽古を進められ、そが中にありても兄嫁が亡くなり、残された子供の世話をなされ、生業のため兄親子と共に九州の大分に行かれるも、さらに地元教会で信心の稽古を進め、兄の再婚、さらに戦時中のこととて戦地に赴く兄の代わりに、兄嫁と共に働きながら子供の世話をされるなど、苦難の中にも常に信心を放さず進められ、兄が戦地より帰りてのち、故郷である旧の愛媛県南宇和郡城辺町に帰り、金光教南宇和教会にて信心の稽古をされる中にも、親先生であられた佐田幸作師が亡くなり、後を継がれた若先生のキヌ工師一人では大変であろうからと、この道の教師養成機関である学院に入学されるは神導きなるか。

されど神のお試しか、汝姫は勉学修行に励む中にも大病である心臓脚氣を患い、痛みも感じず動くことも適わぬ重き病状に医師も首振る絶対安静の中にも、一心に神に向かう信心もて全快の神みかげを蒙るなど、神守り神導き神慮のまにまに卒業し、教師にお取り立てを賜りて、南宇和教会の副教会長として御取次を始め万事の御用の上を真の

信心でもつて取り組み、参来る氏子に慕われながらも、キヌ工師が婿を迎えることになり、このままではお邪魔になるとの思し召しから教師を辞めるも、愛媛県の川上教会長であられた、越知常太郎師が聞かれ、「貴女は金光教の教師をやめてはいけない、貴女のような人は御道の宝だから、教師をやめず、南宇和教会がいやなら、外の所へ布教すればいい。」と申して下され、教務所で御用されていた高知教会二代教会長、道願政治郎師が、「今度御用させて頂きたいと決心がついた時には、私を訪ねて来なさい。」と申して下されるは神慮なるか。

時は過ぎ教師を辞して二年後の昭和二十年一月、金光教高知教会の修行生となり、「私は今までの事は、みな忘れて、一生懸命、道願政治郎親先生を只一人の親として、私の命の限りお仕えさせて頂きたいと思いますので、親先生も私の事を本当の子供だと思ってお付き合います。」と御心は一心に定まり、道願政治郎師の尊き導きを賜りてありしも、昭和二十年七月四日、高知市大空襲に遭われ教会はもとより周辺は焼け野原となり、そが中にありても生命を守られて助けられ、

終戦を迎へしも、世の人々は敗戦を嘆き悲しみ、神も仏もあるものかと混乱社会の厳しき世を汝姫は嘆き、今こそ人々の難儀を救い助けたいとの思いを強くして、高知教会の手續きをもつて新たな布教にと願われ、本部広前の三代金光攝胤君に御取次を願い御取次を頂きて、御神命のままに、昭和二十一年九月二十三日、神の社を始め高知教会の御霊神の御共して神導きを賜り、旧の高岡郡高岡町吹越の地に岡崎家の二階一間を借り受けて金光教高岡布教所として開かれるは尊きことの極みになん。

されば世界戦争の敗戦の混乱の中にこそ難儀な氏子を救ひ助けたいとの願ひ強く持たれ、高知教会初代縫師が教祖の神より賜りしみ教へを我が身に頂き、「女の一心岩をも通す」との一心を貫かれ、人が助かりさへすればとの思ひに寝食を忘れ、ひたすらに祈り、その真心は次第に人々の心に響き、訪ねる人、次々と現れ、混乱の難儀から救われ、亡き命を助けられ、次第に多くの氏子等参拝するようになり、二階一間では手狭となり、昭和二十二年三月三日、これの青木町に移転、神比礼は

いよよ輝き、その神徳は御本部にまで伝わり時の教監、高橋正雄師の御声掛けもあり、昭和二十三年三月一日付けにて、金光教土佐高岡教会として承認せられ汝姫は初代教会長として、昭和二十四年、教団として、御取次成就信心生活運動が進められる中に、高知県の婦人教師代表として役員の御用、教区巡教等も受けられるなど、講師として高知県の教会に巡教なされるは、この道の発展を願われる汝姫の厚き祈りの現れであるか。

さらに、昭和二十八年宗教法人として認可を受けられ代表役員として、この教会も生神金光大神御取次の道の教会としてさらなる発展を願われ御用に励みてありし中に、昼夜を分かたぬ激務の中に左目の光を失い、さらに別なる医師の見立てに心臓弁膜症も見つかると、然ればとて誰にも愚痴不足の一つも申さず、受けておる神みかげに御礼を申し、御用とありては御取次を賜り、神思し召しのまにまに、汝姫は辛苦をも感じさせぬほどに信心を進めて取り組み、神みかげ蒙り、参来る氏子を救い助け、信心継承を願い養女登茂子ゐをこの道の

教師に御導き、さらに婿養子として須崎教会在籍教師の川田顥璋ゐを
迎えられ孫も生まれ、然るに汝姫の腕に抱かれ亡くなりし孫、流れし
孫に心を痛めしも、祈り厚く次々に元気な孫も授かり、御用の合間に世話を
なされるなど先を楽しみつつ、さらに昭和四十七年三月五日に教会
新築の大みかげ蒙り、新広前にて御用に専念せられ、喜びのまにまに
昭和四十七年十月四日、本部広前の教祖大祭に団体バスにて参拝され、
帰教して登茂子ゐと還向祝いの杯を交わし、「私は二十四歳の時に命の
亡きところを神様に助けて頂き数え年七十歳の今日まで、自分の
したい事はみなさせて頂き、子供のなかつた自分が、子供をお授け
頂き、孫まで恵まれ、いつお国替えさせて頂いても、何の思い残す事も
ない、私が死んだら、お前も泣いたりせずにお祝いを送り出してくれよ。」と
言われしは、汝姫は御自らの終の日を知りてありしか、五日に
衣替えを頼まれ、六日の朝も変わらずに取次の御用に当たりしも、
昭和四十七年十月六日の昼に急変し、心筋梗塞にて医師の手当てを
受けるもその夕刻に親教会である高知教会の道願正道師に見守られ、

御礼の言葉とともに齡滿六十九歳をこの世の限りと二十六年の御取次の御用を竟へ給ひて、神府に参ひ昇り給ひぬ。あな尊。あな畏。かくて、そが後を受け給ひし、二代、三代の教会長を始め教師の上に、あるは汝姫につながる者達の仕へ給ひし御用の上に、生業の上にと限りなき靈神の御働きを現されしは忝なきことの極みになむ。

平成二十四年十月六日

右は四十年祭祭詞より抜粋に、言葉を足して初代野村トヨ師の生涯を偲ばせて頂いたものを偲び草とさせていただきます。

そのため読みづらいところはご容赦くださいますようお願いします。さらにトヨ師の御用において御取次の内容、また家族のことなど差し支えし詳細は省かせて頂いておりますことは、ご了承下さい。

なお資料は野村登茂子著「野村トヨ師の生涯」を参照しております。また写真は「布教六十年記念誌」より参照しています。

金光教土佐高岡教会長 野村清治

布教に出発の日



野村トヨ